

梵文『無量寿経』における

諸仏と衆生の呼応（上）

—特に称名と聞名に関して—

畝 部 俊 英

目 次

序 論	2
本 論	9
I. 梵文『無量寿経』における称名と聞名の意味・用法	9
(甲) 称 名	9
(a) シナ訳『無量寿経』における称及びその類語	9
(b) シナ訳『無量寿経』における称及びその類語と梵文との対照	10
(c) 梵文『無量寿経』における称名	15
(d) 梵文『無量寿経』における pari-√kirt(称讃する)の意味・用法	17
(1) nāmadheya(名号)を目的語としない pari-√kirt について	17
(2) nāmadheya を目的語とする pari-√kirt について	20
	(以下次号)
(乙) 聞 名	
(a) シナ訳『無量寿経』における聞名	
(b) シナ訳『無量寿経』における聞名と梵文との対照	
(c) 梵文『無量寿経』における聞名	
(d) 梵文『無量寿経』における √śru(聞く)の意味・用法	
(1) nāmadheya を目的語としない √śru について	
(2) nāmadheya を目的語とする √śru について	
II. 梵文『無量寿経』における称名と聞名の開示するもの	
結 論	

序 論

梵文『無量寿経』（足利校訂本^①）を窺ってみるに、従来のインド学・仏教学の分野ではほぼ固定化せられてきている、インド浄土教における称名についての諸学者の考え方に対し、一つの疑問が生れてきた。

インド浄土教に関する、近年における最もすぐれた研究成果であると思われる『原始浄土思想の研究』において、藤田宏達博士は、次のように称名について述べていられる。少し長文になるが、重要な記述であるので、繁を厭わず引用させていただく。

最後に、称名説に関しては、前述のように、『大阿弥陀経』『平等覚経』に認められる「南無阿弥陀三耶三仏檀」または「南無無量清浄平等覚」と称える説を、原始浄土思想期の説と見ることには疑問はあるが、このような説の原型と見なされるものは、すでに原始仏教に認められる。パーリの表現を以てすれば、“*namo tassa bhagavato arahato sammāsambuddhassa*”と三称する説が、それである。もっとも、この場合は、感動的に自然に発せられたウダーナであって、これによって得益が説かれることはない。しかし、たとえば、*Gotama* という名を呼んだり、*namo buddhāya (or buddhasya)* と称えることによって、災難から逃れることができたという説話は、南北の部派でも、また大乘でも広く知られているから、こうした称名が、何らかの功德・得益をもたらすことは考えられていたと思われる。

『大阿弥陀経』『平等覚経』によると、「南無阿弥陀三耶三仏檀」または「南無無量清浄平等覚」と言うことによって、阿弥陀仏を見ることができるようでなく、盲・聾・暗・癡等の病が癒えたと言く点などは、これと相通するものがある。しかし、このような説は、右の二本以外には認められないから、後世の浄土教の称名説とは関係がない。同じ初期大乘經典でも、＜法華経＞には「南無仏」(*namo 'stu buddhāya*) と言えば、最高のさとり (*agrabodhi*) に達するであろう、という有名な詩句があり、かかる意味の称名思想は、『大品般若経』にも認められるから、初期大乘一般によく知られていたはずである。にもかかわらず、浄土經典においては、かかる称名説が発達しなかったのは何故であるか。これは、今後の解明に待たいたいと思う。^②

この記述から二つのことが知られる。

第一には、原始仏教に認められる、パーリの表現を以てすれば、“*namo tassa bhagavato arahato sammāsambuddhassa*” と三称する説、*Gotama* と呼ぶことや *namo buddhāya (or buddhasya)* と称えることによって、災難から逃れることができるということ、『大阿弥陀經』『平等覺經』のように「南無阿弥陀三耶三仏檀」または「南無無量清淨平等覺」と言うことによって、阿弥陀仏を見ることができるようでなく、盲・聾・喑・癡等の病が癒えたと説くこと、＜法華經＞の「南無仏」(*namo 'stu buddhāya*) と一言いえば、最高のさとり (*agrabodhi*) に達するであろうということ、『大品般若經』にも認められる、この＜法華經＞と同じような称名思想、「かかる称名説」^⑩ が浄土經典においては発達しなかったこと。

第二には、インドの浄土教、または原始浄土思想における称名説を検討するに、「かかる称名説」のみが取り上げられて、それが浄土經典において「発達しなかったのは何故であるか。これは、今後の解明に待ちたいと思う。」と述べられ、別の角度からは、インド浄土教における称名説についてまったく見られることなく、打切られていること。

第一の点については、これまでのインド浄土教の称名説を、ほとんどの学者たちが、「かかる称名説」とのつながりの中に見出そうとしてきたのに対すれば、一つの見解を示したことになるが、第二の点において、浄土經典における本来の称名思想そのものが、いかなるものであるかの吟味検討なくして、今日の常識的称名説または「後世の浄土教の称名説」（これも常識的で曖昧な表現である）の考え方によりかかって、「かかる称名説が発達しなかったのは何故であるか。」といわれるのであるが、これは奇妙なことに思われる。何となれば、浄土經典における本来の称名思想は、「かかる称名説」とはまったく違うものであるとすることも可能であるからである。もしまったく違うものであるとすることが可能ならば、浄土経

梵文『無量寿經』における諸仏と衆生の呼応（上）

典において、「かかる称名説」が発達しなかったことは、「何故であるか。」などといわれるべきことではなく、当然のこととすることもできるであろう。

学問的にインド浄土教における本来の称名思想そのものを究明せんとするならば、「かかる称名説」のみによりかかるのではなく、浄土經典に説かれている本来の称名思想そのものを取り出すことが、先決の問題であると思う。

また藤田博士は、他の個所の註において、

ただし、称名の原語がサンスクリット經典に見当たらないとするのは、なお検討を要するであろう。たとえば、『金光明經』卷二（『大正藏』一六卷三四五頁上）の「三称我名」の原文は *triṣṭkṛtvā nāmadheyam uccārayitavyam* (*Suvarṇabhāṣottamasūtra*, ed. J. Nobel, p.115, l.4; ed. H. Izumi, p.106, l. 17); *miñ-nas lan gsum brjod* (*Die tibetischen Übersetzungen*, hrsg. J. Nobel, S. 88, Z.15) であるから、口称を意味している^④。

と述べていられるが、称名の原語がサンスクリット經典に見当たらないとする説^④も、従来からある固定的な考え方からの発言であり、『金光明經』を引いて、口称を意味する梵文のあることを紹介していられる藤田博士の説も、称名といえば口称であるという考え方のみにとらわれていられるようである。このような固定的な考え方からは、浄土經典そのものに説かれている本来の称名思想は、見出されないと思う。

大体、インド学・仏教学におけるこれまでの称名についての諸学者の考え方の根底には、たとえば、矢吹博士の『阿弥陀仏の研究』、望月博士の『浄土教の起原及発達』などから、この藤田博士の『原始浄土思想の研究』に至るまで、すべて称名の称は、口称の称、即ち人間の行為として阿弥陀仏の名をとなえることという自明的了解があつて、それが、浄土經典には、せいぜい「言南無阿弥陀三耶三仏檀」または「言南無無量清淨平等

覚」の程度で見出されるだけで、それ以外には見当たらないから、阿含經典の「称南無仏」に起原を求めるか、また未解決の問題として残すか、ということになってくるのである。

そこで、インド浄土教における称名の称は、口称の称、人間の行為として阿弥陀仏の名をとなえることであるという、これまでの諸学者の自明的了解のままでよいのであろうかという疑問が、梵文『無量寿經』を窺ってみるに、生じてきたのである。

後に検討する如く、梵文『無量寿經』における「称名」の称にあたる語はいろいろに言い表わされているが、その中心になるものは *pari-√kirt* であろうと思う。

この *pari-√kirt* なる語を梵語辞典でみると、to proclaim on all sides, announce, relate, celebrate, praise, declare, call, name^⑥ などとあり、エジャートンの辞典では特に取り上げていないから、『マハーバーラタ』などにも用いられている普通の梵語であり、ほめる、ほめて説く、名をたたえることである。

またシナ語の称は、藤堂博士の『漢字語源辞典』によれば、

【稱(称)】 *diəŋ* → *dʒiəŋ* (神蒸 開3) 「銓はかるなり。禾+冫……冫の亦声」……稻や穂を手で持ち上げて目方を計ること。〈礼記、檀弓〉「家の存亡を称はかる」とはその用例。〈論語、憲問〉「その力を称せず、その徳を称するなり」とは、もちあげる意より、「ほめあげる」意に転じた用例。また〈荀子、礼論〉「貧富輕重みな称有り」とは、「平均する」意へと傾いた用法である。

【稱】 同上(同上)「揚ぐるなり。人+冫声」……挙(あげる)→誉(ほめあげる)が同系であるように、持ち上げる意から称揚(ほめ上げる)の意へと転じたコトバである。ふつう称の字で代用する^⑦。

とあって、*pari-√kirt* にしろ、称にしろ、「ほめる」という意味が中心であって、口で「となえる」の意は見当たらないのである。

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

更に梵文『無量寿経』の場合には、絶対に見落してはならないことがある。

シナ訳『無量寿経』の第十七願成就文に相当する個所を引用してみよう。

tasya khalu punar Ānanda bhagavato 'mitābhāsyā tathāgatasya
daśasu diḥv ekaikasyāṃ diḥi Gaṅgānadivālukāsamesu buddhakṣe-
treṣu buddhakṣetreṣu Gaṅgānadivālukāsamā buddhā bhagavanto
nāmadheyāṃ parikīrtayante, varṇaṃ bhāṣante, yaśaḥ prakāśaya-
nti, guṇaṃ udirayanti.

(Sukhāvatīvyūha <足利校訂本, 以下略号 Sukh. >

p. 41, l. 25—p. 42, l. 4)

〔また、実に、アーナンダよ、十方の各々の方角にあるガンジス河の砂に等しい（ほどの多くの）仏国土において、ガンジス河の砂に等しい（ほどの多くの）諸仏世尊は、かの世尊アミターバ如来の名号を称讃し、讃歎を説き、名声を説き明かし、功德を称揚する。〕

この例文によって知られる如く、梵文『無量寿経』では、後に検討せられるが、首尾一貫して pari-√kīrt の主語は、諸仏世尊または釈迦牟尼仏であり、菩薩たち (bodhi-sattvāḥ) であろうとも、衆生たち (sattvāḥ) が pari-√kīrt の主語になることは絶対に見出されないのである。阿弥陀仏の名号を称讃することができるのは、釈迦・諸仏であって、衆生のよく為しうることでなく、まして人間の行為としての口称ではないというのが、梵文『無量寿経』の説相である。

この個所と呼応するが如く、シナ訳『無量寿経』第十八願成就文に相当する個所では、衆生について、

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

ye kecit sattvās tasya bhagavato* 'mitābhasya tathāgatasya
nāmadheyaṁ śṛṇvanti, śrutvā cāntaśa ekacittotpādam apy
adhyāśayena prasādasahagataṁ cittam** utpādayanti, sarve te
'vaivarttikatāyāṁ saṁtiṣṭhante 'nuttarāyāḥ samyaksaṁbodheḥ.

※藤田補正表（藤田宏達『梵文無量寿経試訳』所収）による。

※※藤田補正表による。

（Sukh. p. 42, II. 4—8）

〔およそいかなる衆生たちであっても、かの世尊アミターバ如来の名号を聞き、聞きおわって、たとえ一念（というわずかな時間）^⑧の生起でも、深い志向によって、淨信にともなわれた心を生起するならば、かれらすべては、無上なる正等覺より退転しない状態に安住するからである。〕

と述べ、諸仏世尊が阿弥陀仏の名号を称讃するのに対し、衆生たちはどこまでも阿弥陀仏の名号を聞く、聞いて信心を起し不退転に住するといわれている。後に検討せられるが、梵文『無量寿経』では、首尾一貫して、名号を聞くという場合の 'śru の主語は、菩薩、衆生、女人たちである。阿弥陀仏の名号を介して、称讃する諸仏と聞く衆生たちが呼応しているのが、梵文『無量寿経』であり、このような視点から称名の称は見直されなければならないのである。

これまでのインド学・仏教学における称名についての諸学者の所説の如く、その考え方の根底に、人間の行為としての口称の称という理解が存している限り、梵文『無量寿経』には、そのような「称名」はどこにも存在しないし、梵文『無量寿経』は称名について何も開示してくれないであろう。

所が、「諸仏は、阿弥陀仏の名号を称讃する。」↔「衆生たちは、（その諸仏の称讃する）阿弥陀仏の名号を聞く。」という呼応関係によって、梵文『無量寿経』に首尾一貫して説示せられているものを了解することができるならば、梵文『無量寿経』は、われわれに甚深の意義を開示してくれるであろう。

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

そこで称名と聞名について、Ⅰ. 梵文『無量寿経』における意味・用法
Ⅱ. それをいかに了解するか二面から、考究してみたい。

なお、本稿では、梵文『無量寿経』のみに限定して論を進めていく。そこに自からインド浄土教全体または一般という問題に対し、限界があることになるが、梵文『無量寿経』によって説きあらわされているインド浄土教に焦点を絞っていくこととする。

また〈無量寿経〉の原初形態とか発展形態などについても、あまり考慮しないでいく。今は、与えられている梵文『無量寿経』の開示してくるものを受けとめてみたいというのが目的であり、また少なくとも称名と聞名に関する限り、梵文『無量寿経』における説相が、新古の層などということでは混乱していると思われる所は、見出されないからである。

それからシナ訳では『無量寿経』を中心にみていく。『無量寿経』は、シナ五訳のうちで、訳経史的にも、教理史的にも、また今日的意義からも、最も中心となる価値を持っていると思われるからである。

註（敬称は略す）

- ① Sukhāvatīvyūha, édité par A. Ashikaga, Kyoto, 1965.

なお本稿では、梵文『無量寿経』といえば、すべてこの足利校訂本をさし、これはいわゆる The Larger Sukhāvatīvyūha (Sukh.) の一本であり、The Smaller Sukhāvatīvyūha ではない。

- ② 藤田宏達『原始浄土思想の研究』559頁—560頁。

- ③ この「かかる称名説」の語は、直前の〈法華経〉や『大品般若経』の称名思想を受けているように思われるが、今はこの引用箇所全体にあげられている称名説を受けている語として扱う。すべて口称という共通の特徴をもっているからである。

- ④ 藤田宏達、前掲書 p. 549, 註 (14)。

- ⑤ 香川孝雄「称名思想の形成」(『印度学仏教学研究』第十一卷第一号) 46頁下段。

- ⑥ Sanskrit-English Dictionary, by Sir Monier Monier-Williams, p. 591, C.

- ⑦ 藤堂明保『漢字語源辞典』97頁。

- ⑧ 荻原雲来『荻原雲来文集』279頁—281頁参照。

本 論

I. 梵文『無量寿経』における称名と聞名の意味・用法

（甲） 称 名

（a） シナ訳『無量寿経』における称及びその類語

先づシナ訳『無量寿経』から、称及びその類語と思われるもの、名また
『』は名号と結びついている称の類語と思われるものを取り出してみる。

- | | | |
|-----|----------------------------|----------|
| 1) | 举声自称（『真宗聖教全書』一、〈以下略号『真聖全』〉 | 2頁） |
| 2) | 名称普至 | （同上 3頁） |
| 3) | 不可称計 | （同上 4頁） |
| 4) | 咨嗟称我名 | （同上 9頁） |
| 5) | 不可称説 | （同上 15頁） |
| 6) | 称其光明 | （同上 17頁） |
| 7) | 咸共歎誉 | （同上 17頁） |
| 8) | 日夜称説 | （同上 17頁） |
| 9) | 所共歎誉称其功德 | （同上 17頁） |
| 10) | 歎其光明 | （同上 17頁） |
| 11) | 不可称計 | （同上 17頁） |
| 12) | 不可称説 | （同上 17頁） |
| 13) | 不可称計 | （同上 17頁） |
| 14) | 称其所聞 | （同上 21頁） |
| 15) | 称其形色 | （同上 22頁） |
| 16) | 皆共讃歎 | （同上 24頁） |

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

17)	莫不称歎	(同上	25頁)
18)	歌歎最勝尊	(同上	26頁)
19)	歌歎仏徳	(同上	28頁)
20)	所共称歎	(同上	30頁)
21)	不可称説	(同上	30頁)
22)	不可称数	(同上	34頁)
23)	常共称揚讃歎彼仏	(同上	42頁)
24)	不可称智	(同上	43頁)
25)	不可称計	(同上	44頁)
26)	不可称計	(同上	45頁)
27)	不可称計	(同上	45頁)
28)	我但説十方諸仏名号	(同上	45頁)

以上のほぼ28の個所に見出される。

(b) シナ訳『無量寿経』における称及びその類語と梵文との対照

これらの称及びその類語と思われるものの中で、梵文『無量寿経』に相応個所を持つものを調べてみると、4), 5), 11), 12), 13), 16), 17), 20), 23), 28) の10の個所にある。この10の個所の一つ一つについて、順次シナ訳と梵文とを対照してみよう。

1) 設我得仏，十方世界無量諸仏，不悉咨嗟称我名者，不取正覚。

(『真聖全』9頁)

sacen me bhagavan bodhiprāptasya, nāprameyeṣu buddhakṣetreṣv aprameyāsāṃkhyeyā buddhā bhagavanto* nāmadheyāṃ parikīrtayeyur, na varṇaṃ bhāṣeran, na praśaṃsāṃ abhyudiraye-

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

yur, na samudīrayeyur, mā tāvad aham anuttarāṁ samyaksambodhim abhisambudhyeyam.

※藤田補正表による。

(Sukh. p. 13, II. 17—21)

〔もしも、世尊よ、わたくしが覺りを得たときに、無量の仏国土における無量無数の諸仏世尊が、〔わたくしの〕名号を称讃せず、讃歎を説かず、讃辭を宣揚せず、高揚しないようであるならば、その間は、わたくしは無上なる正等覺をさとりません。〕

2) 如是功徳、不可称説、口氣香潔如優曇羅華。身諸毛孔出栴檀香。

（『真聖全』15頁）

sa evaṁrūpaṁ kuśalaṁ samudānayaḍ*, yad asya bodhisattvacaryāṁ*** carato, 'prameyāsaṁkhyeyācintyātulyāmapāparimāṇābhi-lāpyāni kalpakoṭinayutaśatasahasrāṇi surabhidivvyātikrāntacandanagandho mukhāt pravāti sma; sarvaromakūpebhya utpalagandho vāti sma.

※藤田補正表による。

※※藤田補正表による。

(Sukh. p. 25, II. 18—22)

〔かれは、このような善を集めた。すなわち、無量・無数・不可思議・無比・不可量・無限量・不可説な何十万・百万・千万劫の間、菩薩の行を実践するとき、かれの口からはかぐわしい、天の〔香り〕を超えた栴檀の香りが漂い出た。一切の毛孔からは青蓮華の香りが漂うた。〕

（藤田試訳 p. 65, II. 8—12に従う）

3) 仏語阿離。無量寿仏、寿命長久、不可称計。

（『真聖全』17頁）

aparimitaṁ cānanda tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasyāyuspramāṇaṁ, yasya na sukaraṁ pramāṇam adhigantum.

(Sukh. p. 29, II. 15—16)

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応 (上)

〔また、アーナンダよ、かの世尊アミターバ如来の寿命の量は無量であり、その量は容易に知ることができない。〕

(藤田試訳 p. 73, II. 3—4に従う)

4) 又声聞・菩薩、其数難量、不可称説。

(『真聖全』17頁)

tasya khalu punar Ānandāmitābhasya tathāgatasyāprameyaḥ
śrāvakasaṃgho, yasya na sukaṛaṃ pramāṇam udgr̥hitum.

(Sukh. p. 28, II. 10—11)

〔また、実に、アーナンダよ、かのアミターバ如来の声聞の僧団は無量であり、その量は容易に理解することができない。〕

(藤田試訳 p. 70, I. 11—p. 71, I. 1に従う)

5) 彼仏初会声聞衆数、不可称計。

(『真聖全』17頁)

Amitābhasya tathāgatasya prathamam śrāvakasannipātam
gaṇayeyus, tair gaṇayadbhiḥ śatatamo 'pi bhāgo na gaṇito
bhavet; sahasratamo 'pi, śatasahasratamo 'pi, yāvat kalām apy,
upamām apy, upaniśām api, na gaṇito bhavet.

(Sukh. p. 28, II. 22—26)

〔アミターバ如来の最初の声聞の会衆を数えたとしても、これらの数え手たちによって、百分の一さえも数えられず、千分の一さえも、十万分の一さえも、ないし極少分さえも、譬喩さえも、近似数さえも数えられないであろう。〕

(藤田試訳 p. 71, II. 13—16に従う)

6) 十方恆沙諸仏如来、皆共讃歎無量寿仏威神功德、不可思議。

(『真聖全』24頁)

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

tasya khalu punar Ānanda bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya
daśasu dikṣv ekaikasyām diśi Gaṅgānadivālūkāsamesu buddhakṣe-
treṣu Gaṅgānadivālūkāsāmā buddhā bhagavanto nāmadheyaṁ
parikīrtayante, varṇaṁ bhāṣante, yaśaḥ prakāśayanti, guṇam
udirayanti.

(Sukh. p. 41, I. 25—p. 42, I. 4)

〔また、実に、アーナンダよ、十方の各々の方角にあるガスジス河の砂に等しい（ほどの多くの）仏国土において、ガンジス河の砂に等しい（ほどの多くの）諸仏世尊は、かの世尊アミターバ如来の名号を称讃し、讃歎を説き、名声を説き明かし、功德を称揚する。〕

7) 十方世界無量無辺不可思議諸仏如来、莫不称歎於彼。

（『真聖全』25頁）

te tathāgatā daśasu dikṣv aprameyāsamkhyeyāsu lokadhātuṣu※
tasyāmitābhasya tathāgatasya nāmadheyaṁ parikīrtayanto,
varṇaṁ※※ ghoṣayantaḥ, praśaṁsām abhyudirayanti.

※ lokadhātuṣu を訂正。

※※藤田補正表による。

(Sukh. p. 43, II. 14—17)

〔かの如来たちは十方の無量・無数の世界において、かのアミターバ如来の名号を称讃し、讃歎を宣べ、讃辞を宣揚する。〕

8) 恭敬供養無量諸仏、常為諸仏、所共称歎。

（『真聖全』30頁）

ye te bahubuddhakoṭīnayutaśatasahasrāvaropitakuśalamūlā,
jinavarapraśastā, lokapaṇḍitā, uttaptajñānasamudgatā, jinastutās,
.....。 (Sukh. p. 54, II. 4—7)

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

〔かれらは、何十万・百万・千万の多くの仏たちのもとで善根を植え、……
……、最上の勝者たちによって讃歎され、世間の賢者であり、燃え輝く智慧
で傑出し、勝者たちによって賞讃され、……。〕

9) 十方国土諸仏如来，常共称揚讃歎彼仏無著無礙。

（『真聖全』42頁）

yasya taṁ nāmadheyam anāvarenaṁ daśaśiḥ loka vighuṣṭam
ekaikasyāṁ śiḥ Gaṅgānadivālikāsamā buddhā bhagavanto varṇa-
yanti, stuvanti, praśaṁsanty, asakṛd asakṛd asaṅgavāco*,
'pratīvākyāḥ. ※※

※藤田補正表による。

※※藤田補正表による。

（Sukh. p.55, II.1—5）

〔十方の世界に滞りなくとどろきわたったかの名号を、それぞれの方角に
おけるガンジス河の砂に等しい(ほどの多くの)諸仏世尊が、繰返し繰返し、
よどみのない言葉、さまたげのない言葉で、讃歎し、讃美し、賞揚するの
である。〕

10) 我但説十方諸仏名号，及菩薩・比丘生彼国者，晷夜一劫尚未能竟。

（『真聖全』45頁）

etenājita paryāyeṇa paripūrṇakalpakoṭīnayutaṁ nāmadheyāni
parikīrtayeyāṁ teṣāṁ tathāgatānāṁ, yebhyaḥ te bodhisattvā upa-
saṁkrāṁanti Sukhāvatīm lokadhātum tam Amitābham tathāga-
taṁ draṣṭum vanditum paryupāsītum, na ca śakyaḥ paryanto
'dhigantum.

（Sukh. p.62, II.13—17）

〔アジタよ、このようなわけで、わたくしが、満百万・千万劫の間、かの

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

アミターバ如来にまみえ、礼拝し、仕えるために、極楽世界に赴くかれら菩薩たちが属しているところの如来たちの名号を称讃するとしても、〔どれだけ称讃するとしても、その〕際限は知ることはいかなるものである。〕

以上の10の梵文のうち、称名の名にあたる *nāmadheya*（名、名号）— 複数形のものを除く — が見出されるのは、1), 6), 7), 9) の4例である。

（c） 梵文『無量寿経』における称名

われわれが、今日、「称名」と呼んでいるものは、インド、シナ、朝鮮、日本と伝承してきている浄土教関係の多くの経・論・釈にもとづき、いろいろな浄土教者たちによって永年にわたって、受容、形成、変容されてきているものであろうが、ここでは、梵文『無量寿経』における称名の語・意味・用法を知るために、以上の如き仮りの手続きによって、最も単純に、シナ訳語の称名という語に着目して、シナ訳『無量寿経』における称及びその類語を取り出し、更にそれと相応する梵文によって、*nāmadheya* を含む梵文のみを抜き出し、シナ語である称名に相応する梵文を、梵文『無量寿経』より取り出そうと試みるのである。勿論、これは言葉による操作である点、或いはその他の点で、異論のあるところであろうが、ここでは、一つの試みとして、あえて最も単純な方法を選んで、梵文『無量寿経』における称名について考えてみようとするのである。従来の方法によっては、「宗学的な見地を離れて検討し」^① たといわれながら、いわゆる伝統的な「称名」または口称の「称名」の観念を一步も出していないところで扱われているから、どんなに広くインド仏教・浄土教の文献を渉猟しても「無量寿経をはじめとして梵文原典の存在する経典では決定的な「称名」の原語は見当らず」^② という結論しか得られないからである。

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応 (上)

さて前に抜き出しておいた nāmadheya を含む四つの梵文から、主語、目的語の部分、動詞を取り出し、共通する語または語句の頻度数を調べてみると、

<主 語>

buddhāḥ	3 回
bhagavantaḥ	3 回
tathāgatāḥ	1 回

<目的語> の 部 分

nāmadheyam	1 回
tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyam	...	1 回
tasyāmitābhasya tathāgatasya nāmadheyam	1 回
taṁ nāmadheyam	1 回

<動 詞>

parikīrtayeyur	}	(pari-√kīrt)	3 回
parikīrtayante			
parikīrtayantaḥ			
varṇaṁ bhāṣeran	}	(varṇaṁ √bhāṣ)	2 回
varṇaṁ bhāṣante			
varṇaṁ ghoṣayantaḥ	1 回	
varṇayanti	1 回	
praśaṁsām abhyudīrayeyur	}	(praśaṁsām abhy-ud-√īr) ...	2 回
praśaṁsām abhyudīrayanti			
praśaṁsanti	1 回	
samudīrayeyur	1 回	
yaśaḥ prakāśayanti	1 回	
guṇaṁ udirayanti	1 回	
stuvanti	1 回	

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

という結果になる。この主語、目的語の部分、動詞のうち、最も頻度数の高いもので、要約的に、(b) 項の 6) (13頁) の梵文にあてはめて、再構成してみると、およそ次の如くなるであろう。

buddhās tasyāmitābhasya tathāgatasya nāmadheyaṁ parikīrtayante.

〔諸仏は、かのアミターバ（無量光）如来の名号を称讃する。〕

梵文『無量寿経』における称名は、従って上のようになると思われる。

そこでこの称名の称にあたる *pari-√kīrt* なる語には、梵文『無量寿経』の全体では、どのような意味・用法があるのか、調べてみようと思う。

(d) 梵文『無量寿経』における *pari-√kīrt* (称讃する) の意味・用法

(1) *nāmadheya* (名号) を目的語としない *pari-√kīrt* について

1) *tasya me Bhagavān sādhu tathā dharmam deśayatu, yathāhaṁ kṣipram anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisambuddhayaṁ**; *asamasamas tathāgato loke bhaveyaṁ; tāṁś ca me Bhagavān ākārān parikīrtayatu, yair ahaṁ buddhakṣetrasya guṇavyūhasaṁpadaṁ pariṅghīyām* **.

※藤田補正表による。

※※藤田補正表による。

(Sukh. p. 8, l. 25—p. 9, l. 3)

〔わたくしがすみやかに無上なる正等覚をさとり、世間に 等しいもののない如来となることが出来ますような、そのような法を、なにとぞ世尊はこのわたくしに示して下さい。また、わたくしが、仏国土の功德の莊嚴の成就をおさめとることが出来ますように、それらの様相を、世尊はわたくしに称讃* して下さい。〕

(藤田試訳 p. 39. 11. 7—11 に従う。ただし、※ 称揚を称讃とする。)

梵文に明らかなように、ここの *parikīrtayatu*（称讃して下さい）は、*deśayatu*（示して下さい）と同じ意味で用いられているのである。このことが認められるならば、*pari-√kīrt* という語には、*√diś* と同じように示す、説くという意味があることになる。但し、ここでは *dharmam deśayatu*, *ākārān parikīrtayatu* とあるから *dharma*（法）を示す場合には *√diś*, *ākāra*（相）を（ほめて）説く場合には *pari-√kīrt* という区別がなされている。

なお、この *√diś*, *pari-√kīrt* の主語は、*Bhagavān*（世尊）であることが見落されてはならない。

2) *tad anenānanda paryāyeṇa sā lokadhātuḥ Sukhāvatīty* ucyate saṃkṣiptena, na punar vistareṇa. kalpo 'pi parikṣayaṃ gacchet, Sukhāvatyaṃ lokadhātuḥ sukhakāraṇeṣu parikīrtiyamāneṣu ***; na tv eva śakyaṃ teṣāṃ sukhakāraṇānāṃ paryanto 'dhigantum.*

※藤田補正表による。

※※藤田補正表による。

(*Sukh.* p. 37, *II*. 1—5, cf. p. 40, *I*. 22—p. 41, *I*. 1)

〔アーナンダよ、こういうわけで、かの世界は、略して＜極楽＞と呼ばれるのである。詳しく（述べたの）ではない。もし極楽世界のもろもろの安楽の原因が称讃されているならば、一劫も過ぎ去ってしまうであろう。しかもなお、それらもろもろの安楽の原因の際限は知ることはできないのである。〕

この *parikīrtiyamāneṣu*（称讃されつつある）ということも、1)と同じく、（ほめて）説かれるという意味で用いられている。従って岩波文庫本の訳に「（詳しく説いていたら）」^⑩、岩本訳に「（詳しく説くならば）」^⑩、藤田試訳に「（詳しく述べるならば）」^⑩ という語句が補足してあるが、南条訳が「宣説する間だに」^⑩ とする如く、*pari-√kīrt* に説くという意味があることが、はっきりしていれば、補足する必要はないであろう。ここで

梵文『無量寿經』における諸仏と衆生の呼応（上）

は *pari-√kīrt* にほめて説く意に、更に、くわしく説く意があることが知られる。

なおこの *parikīrtiyamāneṣu* の意味上の主語は釈尊である。

3) *sarve pi sattvāḥ sugatā bhaveyuḥ,*
viśuddhajñānāḥ paramārthakovidā.
te kalpakoṭim atha vāpi uttarim,
Sukhāvativarṇa prakāśayeyuḥ. (1)
kṣaya kalpakoṭiya vrajeyu tāś ca,*
Sukhāvatīye na ca varṇa antaḥ.
*kṣayaṁ na gacchet pratibhā ca*** teṣāṁ*
prakāśayantāna tha varṇamālā. (2)

※藤田補正表による。

※※藤田補正表による。

(*Sukh. p. 41, II. 4—11*)

〔(1)一切の衆生たちもまた、善逝となり、
清浄な智をもち、勝義に熟達した者となるであろう。

かれらは、千万劫の間も、またそれ以上にも、
極楽の讃歎を説き明かすであろう。

(2)そして、千万劫の間の、これらの讃歎の連続が尽きるとしても、
極楽の讃歎は終わりに達しない。

かれら〔讃歎を〕説き明かす者たちの弁才も、また尽きることがないであろう。〕

この偈文は、すべての漢訳に見当たらないものである。その意味で新しい成立の部分であろう。

直接には *pari-√kīrt* なる語はないが、 *varṇaṁ pra-√kāś* なる語句によって、*pari-√kīrt* と同じ意味を表わしているように思われる。

従って、前の (c) 項の所 (16頁) で *pari-√kīrt* と同じ意味を表わす動詞として、*varṇaṁ bhāṣante*, *varṇaṁ ghoṣayantaḥ*, *varṇayanti*, *yaśaḥ prakāśayanti* などの語句が見られたが、この新しい成立の部分に

varṇa, pra-√kāś なる語が見出されることから判断すると, pari-√kīrt と同じ意味を表わす他の動詞は, pari-√kīrt と比べると, 比較的新しい語句であろうか。pari-√kīrt の意味を強調し, よく表わさんとして, pari-√kīrt よりも後に付け加えられていったのであろう。(b)項の所で抜き出した 9) (14頁)の梵文では, pari-√kīrt が見られず, その代わりに varṇayanti, stuvanti, praśaṁsanti が用いられているが, この箇所は, 『大阿弥陀経』『平等覚経』に相応箇所を持っていないことも, このことを裏付けるものであろう。

ここでは, 一切の衆生たちが, 善逝となり, 極樂をほめたたえて説くであろうことが, varṇaṁ pra-√kāś なる語によってあらわされ, その主語は, 善逝たち (sugatāḥ) である。衆生がほめたたえて説くのではないことに注意すべきである。

他の箇所 (Sukh. p. 54, ll. 6—7) において, 極樂に生れた衆生を, 「最上の勝者たちによって讃歎せられたるものたち (jinavarapraśastāḥ)」 「勝者たちによって賞讃せられたるものたち (jinastutāḥ)」といい, また他の箇所 (Sukh. p. 63, ll. 19—21) において, この『無量寿経』に説かれる法門 (dharmaparyāyāḥ) を「一切の仏たちによって称歎せられたるもの (sarvabuddhasaṁvarṇitāḥ)」, 「一切の仏たちによって讃歎せられたるもの (sarvabuddhapraśastāḥ)」, 「一切の仏たちによって承認せられたるもの (sarvabuddhānujñātāḥ)」とあらわされていることも, 勝者たち (jināḥ), 或いは仏たち (buddhāḥ) にして, はじめてほめたたえることができるものであることが知られる。

1) sacen me bhagavan bodhiprāptasya, nāprameyeṣu buddha-
kṣetreṣv aprameyāsaṁkhyeyā buddhā bhagavanto* nāmadheyaṁ
parikirtayeyur, na varṇaṁ bhāṣeran, na praśaṁsām abhyudīraye-

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

yur, na samudirayeyur, mā tāvad aham anuttarāṃ samyaksaṃ-
bodhim abhisambudhyeyam.

※藤田補正表による。

(Sukh. p. 13, II. 17—21)

〔もしも、世尊よ、わたくしが覺りを得たときに、無量の仏国土における無量無数の諸仏世尊が、〔わたくしの〕名号を称讃せず、讃歎を説かず、讃辭を宣揚せず、高揚しないようであるならば、その間は、わたくしは無上なる正等覺をさとりません。〕

この梵文はシナ訳『無量寿経』第17願に相応するところであり、梵文も17番目にあげられている願文である。

ここでは, parikīrtayeyur が更に varṇaṃ bhāṣeran, praśaṃsām abhyudīrayeyur, samudīrayeyur と重ねてあらわされているが、これは梵語仏典によく見られる表現方法で、いずれもほめて説く^①の意である。従って岩波文庫本の訳^②、岩本訳^③の如く, parikīrtayeyur のみを「唱える」と訳すのは適切ではないと思われる。シナ訳では、『大阿弥陀経』が「説」、『平等覺経』が「歎」、『無量寿経』が「咨嗟称」、『無量寿如来会』が「咨嗟称歎」と訳し、いずれも「唱える」または後世の口称の称でなく、ほめる、ほめて説く^④意である。これらの動詞の主語が諸仏世尊 (buddhā bhgavantaḥ) であるのは、これらの動詞によってあらわされている「ほめる、ほめて説く」行為は、衆生の行為、「唱える」という人間の行為ではなく、諸仏世尊の行為であるからである。

2) tasya khalu punar Ānanda bhagavato 'mitābhasya tathāga-
tasya daśasu dikṣv ekaikasyāṃ dīśi Gaṅgānadivālūkāsameṣu bud-
dhakṣetreṣu Gaṅgānadivālūkāsamā buddhā bhagavanto nāmadhey-
aṃ parikīrtayante, varṇaṃ bhāṣante, yaśaḥ prakāśayanti, guṇam
udīrayanti.

(Sukh. p. 41, I. 25—p. 42, I. 4)

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

〔また、実に、アーナンダよ、十方の各々の方角にあるガンジス河の砂に等しい（ほどの多くの）仏国土において、ガンジス河の砂に等しい（ほどの多くの）諸仏世尊は、かの世尊アミターバ如来の名号を称讃し、讃歎を説き、名声を説き明かし、功德を称揚する。〕

これはシナ訳『無量寿経』の17願成就文といわれている所に相応する個所であるが、ここでも *parikīrtayante* は *varṇaṁ bhāṣante, yaśaḥ prakāśayanti, guṇaṁ udirayanti* ということばで重ねて明らかにせられている如く、*parikīrtayante* のみが「唱える」という意味をもっているのではなく、何度も述べてきたが、ほめる、ほめて説く意である。

この場合も、これらの動詞の主語は、諸仏世尊であって、諸仏世尊がアミターバ（無量光）如来の名号（*nāmadheya*）を称讃する（*parikīrtayante*）のである。

所で、ここに注目すべきことが、一つある。この梵文は、次に「それは何故であるか（*tat kasya hetoḥ*）。」と続いていることである。即ち、諸仏世尊がアミターバ如来の名号を称讃することに対し、「それは何故であるか。」といって、以下でその理由を述べているのである。

tat kasya hetoḥ. ye kecit sattvās tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyam śṛṇvanti, śrutvā cāntaśa ekacittotpādam apy adhyāśayena prasādasahagataṁ*** cittam**** utpādayanti, sarve te 'vaivarttikatāyām saṁtiṣṭhante 'nuttarāyāḥ samyak-sambodheḥ.*

※藤田補正表による。

※※藤田補正表による。

※※※藤田補正表による。

(Sukh. p. 42, II. 4—8)

〔それはなぜであるか。およそいかなる衆生たちであっても、かの世尊ア

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

ミターバ如来の名号を聞き、聞きおわって、たとえ一念（というわずかな時間）の生起でも、深い志向によって、淨信にともなわれた心を生起するならば、かれらすべては、無上なる正等覺より退転しない状態に安住するからである。〕

これは、シナ訳『無量寿経』のいわゆる18願成就文に相応する個所である。

諸仏世尊がアミターバ如来の名号を称讃する理由として、衆生たちがアミターバ如来の名号を聞き、聞いて信心を起こせば、不退転に住するからであるというのである。即ち、諸仏世尊がアミターバ如来の名号を称讃するのは、単に称讃するということではなく、称讃することによって、衆生たちがアミターバ如来の名号を聞くことができ、聞いて信心を起こし、不退転に住することができるのである。言い換えれば、衆生たちが信心を起こし不退転に住することができるのは、諸仏世尊がアミターバ如来の名号を称讃するのを聞くことによって、初めて可能となるのである。

この中で、

sattvās tasya bhagavato 'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyam
śṛṇvanti.

〔衆生たちは、かの世尊アミターバ如来の名号を聞く。〕

というこの個所こそ、先に梵文『無量寿経』における称名として、再構成してみたところの、

buddhās tasyāmitābhasya tathāgatasya nāmadheyam parikirta-
yante.

〔諸仏は、かのアミターバ如来の名号を称讃する。〕

とぴったりと対応するものである。アミターバ如来の名号を介して、一方

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

は主語が諸仏であり、動詞が「称讃する」であり、他方は主語が衆生たちであり、動詞が「聞く」である。

これまで見てきた如く、*pari-√kīrt* をはじめとする「ほめる」意の動詞の場合の主語は、梵文『無量寿経』においては、終始、諸仏世尊（釈迦牟尼世尊も含む）であったが、これに対し、名号を聞く（*√śru*）の場合は、この例の如く、終始、その主語は *sattvāḥ*（衆生たち）であろうか。この点については、後にくわしく検討するが、ともあれ、ここの個所においては、「それは何故であるか。」ということばを中にはさんで、諸仏の称名と衆生の聞名が対応していることになる。称名は聞名との対応において、初めて明瞭なる姿をあらわしてくるように思われるが、このことは後に明らかにせられるであろう。

ここでは、*nāmadheya* を目的語とする *pari-√kīrt* なる動詞を含む個所を、更に梵文『無量寿経』からひろってみよう。

3) *imaṃ khalv Ānandārthavaśaṃ* saṃpaśyantas, te tathāgatā daśasu dikṣv aprameyāsaṃkhyeyāsu lokadhātuṣu*** tasyāmitābhāsyā tathāgatasya nāmadheyaṃ parikīrtayanto, varṇaṃ**** ghoṣayantaḥ, praśaṃsām abhyudīrayanti.*

※藤田補表正による。

※※ *lokadhātuṣu* を訂正。

※※※藤田補正表による。

(Sukh. p. 43, II. 14—17)

〔実に、アーナンダよ、この道理を見て、かの如来たちは十方の無量無数の世界において、かのアミターバ如来の名号を称讃し、讃歎を宣べ、讃辞を宣揚する。〕

ここでも、*parikīrtayantaḥ* は、*varṇaṃ ghoṣayantaḥ, praśaṃsām abhyudīrayanti* といいかえられている。主語は如来たち (*tathāgatāḥ*)

梵文『無量寿經』における諸仏と衆生の呼応 (上)

となっているが、諸仏 (buddhāḥ), 世尊たち (bhagavantaḥ) と同じことである。

4) yasya taṁ nāmadheyam anāvaraṇaṁ daśadiśi loke vighuṣ-
ṭam ekaikasyāṁ diśi Gaṅgānadīvālikāsamā buddhā bhagavanto
varṇayanti, stuvanti, praśaṁsanty, asakṛd asakṛd asaṅgavāco *
'prativākyāḥ.***

※藤田補正表による。

※※藤田補正表による。

(Sukh. p. 55, II. 1—5)

〔十方の世界に滞りなくとどろきわたったかの名号を、それぞれの方角に
おけるガンジス河の砂に等しい(ほどの多くの)諸仏世尊が、繰返し繰返し、
よどみのない言葉、さまたげのない言葉で、讃歎し、讃美し、賞揚するの
である。〕

ここでは、pari-√kīrt なる語は見当たらず、varṇayanti, stuvanti,
praśaṁsanti という言葉でもって、pari-√kīrt と同じ「ほめる、ほめて
説く」意をあらわしている。

所で、ここのシナ訳をしてみると、『大阿弥陀経』、『平等覺経』には、
相応する個所がない。既に前で述べた如く、この個所は比較的新しい成立
の部分であるとするならば、pari-√kīrt のかわりにあらわされている、こ
れらの動詞は pari-√kīrt よりも後に「アミターバ如来の名号をほめる、
ほめて説く」意の語として用いられることとなったものであろうか。

5) etenājita paryāyeṇa paripūrṇakalpakoṭīnayutaṁ nāmadheyā-
ni parikīrtayeyāṁ teṣāṁ tathāgatānāṁ, yebhyas te bodhisattvā
upasaṁkrāṁanti Sukhāvatīṁ lokadhātum tam Amitābhaṁ tathāga-
taṁ draṣṭum vanditum paryupāsītum, na ca śakyaḥ paryanto
'dhigantum.

(Sukh. p. 62, II. 13—17)

梵文『無量寿経』における諸仏と衆生の呼応（上）

〔アジタよ、このようなわけで、わたくしが、満百万・千万劫の間、かの
アミターバ如来にまみえ、礼拝し、仕えるために、極楽世界に赴くかれら菩
薩たちが属しているところの如来たちの名号を称讃するとしても、〔どれだ
け称讃するとしても、その〕際限は知ることとはできないのである。〕

ここでは、ドウシュプラサハ如来をはじめ、ヴァイシャーラディヤ・ブ
ラープタ如来に至る14の如来のもから、多くの菩薩たちが、「アミターバ
如来にまみえ、礼拝し、仕え、尋ね、問いをなすために、極楽世界に生ま
れるであろう。」と、釈尊が説いてきて、「わたくしが、満百万・千万劫の
間、……。」というのであるから、この場合の「極楽世界に赴くかれら菩薩
たちが属しているところの如来たちの名号を称讃するとしても」とは、極
楽世界に赴くかれら菩薩たちが属しているところの如来たちの名前を一つ
一つ取りあげ説きのべようとしても、の意味であろう。従って「際限は知
ることとはできない」とは、説きつくすことができないという意味であろう。

阿弥陀仏の名号を口で唱えるということからのみでは、この個所は理解
せられない。pari-^ʿkirt は、仏が称讃することであり、更に具体的にいえ
ば、何かをほめて説くことなのである。この個所は、『大阿弥陀経』、『平
等覚経』にも見出される、古い成立の部分である。

以上、梵文『無量寿経』における pari-^ʿkirt の意味・用法をいろいろ
見てきたのであるが、意味としては「ほめる、ほめて説く、具体的に、一
つ一つ取りあげて説く」などが知られ、用法としては、「アミターバ如来
の名号をほめる」という場合の pari-^ʿkirt の主語は、梵文『無量寿経』
に首尾一貫して、諸仏（世尊たち、如来たち）であって、ほめる、ほめて
説くことができるのは、諸仏のみであることが知られた。従って衆生また
は人間の行為としての口称または唱えるということは、梵文『無量寿経』
にまったく認められないのは、当然のことである。衆生たちは、諸仏がほ
め勧めるアミターバ如来の名号を聞くのである。次に聞名について考察し
てみよう。

註

- ① 香川孝雄「称名思想の形成」（『印度学仏教学研究』第十一卷第一号）39頁上段。
- ② 同上，46頁下段。
- ③ 中村 元，早島鏡正，紀野一義『浄土三部経 上』57頁。
- ④ 岩本 裕『梵文和訳 大無量寿経』53頁。
- ⑤ 藤田宏達『梵文無量寿経試訳』85頁，91頁。
- ⑥ 南条文雄『梵文和訳仏説無量寿経，梵文和訳仏説阿弥陀経』170頁。
- ⑦ 中村 元，早島鏡正，紀野一義，前掲書，28頁。
- ⑧ 岩本 裕，前掲書，20頁。

（48. 8. 31）

〔付記〕 余白を借りて一言付記いたします。

本稿が生まれることになりましたのは，去る昭和47年7月，真宗大谷派の安居に一夏参加させていただいたことによります。

本講の舟橋一哉先生，次講の藤田宏達先生には，いろいろ御指導いただき，心より御礼申し上げます。

梵文『無量寿経』の和訳は，この安居の時の藤田先生の講本，『梵文無量寿経試訳』を参照させていただきましたが，＜従う＞ということわり書きのない場合は私の考えが加えられており，責はすべて筆者たる私にあります。